

医学部松濤会の流れ (転載)

(前) 医学部松濤会監督 佐藤 中

東邦大学医学部に空手部を創設したのは、中村脩先生（昭和39年卒 耳鼻科開業）である。

昭和35年春、大学本館三階の講堂兼柔道場で一人、一生懸命に空手の練習をしている黒帯姿の新入生（三年生）がみられた。それが中村脩先生で、当時、剛柔流極真会の初段であった。そこで、空手部同好会を創ろうという話をされ、仲村健一先生（35年卒 産婦人科）も入会した。二年生上級には東急道場松濤会初段の先輩がおられ、初代主将になつて戴いたのが本間義章先生（第二内科 佐渡病院）であった。道場は三階の空き部屋を改造して床板を張り、サンドバッグ、巻きワラと、中村脩先生の手腕によつて次第に充実していった。

その年は、浦山、細川の両先輩（松濤）や、矢野、山崎、望月ら（極真）の同級生が入会し、剛柔流の突きに松濤会の腰をミックスして全員組手をするという練習が開始された。指導には浜田純三先生も来られることになった。昭和36年春の一周年目には、実績が認められて晴れて「部」に昇格し、中村脩先生が2代目主将となつた。習志野からは、田宮 親（極真）、中島 徹（松濤）が三年となつて入部した。田宮君は、習志野松濤会から剛柔流に転じ、独特の格闘術の才能は群を抜いていた。中島君は、典型的にキレイな突きと蹴りを見せた。続いて、大谷宏明、西村 昇、菊地、袖山君ら入部し、特に大谷君（松濤）は激しい突撃力を爆発させたものである。

合宿は、新入生歓迎、夏休み、冬休み前、寒稽古、春休みと年五回。この年の東日本医学生体育大会には新潟で

参加し、ついでに佐渡の本間先輩のお宅にお邪魔して、海に潜り背中を焼いたものであった。本間先輩は、「一に勉強、二に空手」と、我々の人間形成にも尽力下された。

昭和⁷年には根性の大沢満雄、切れ抜の片山圭男が入部し、共に極真会で試合に出でては技を競いあつた。

そのうち名越教授（耳鼻咽喉科）が部長となられた。また中村先生の弟さんである中村忠氏も、大山道場から極真会の指導に来られ、その無敵の技を披露して下さつたものである。更に小原該ちゃん、小島国利（極真）や、異色人間で渡米中の石森哲夫、黒沢君、（松濤）らも加わり、松濤会の基本に剛柔流の自由組手と、かなり自由な雰囲気の中で練習出来た。この頃、桐村正憲先輩も入部された。

昭和38年には、梅田嘉明、前田光士、川岡一彦の活気ある極真トリオ、永井清博や松本光民、ユーモアあるジヤンプ蹴りの大橋哲二（渡米）が入部。松濤会には渋谷昌良、吉田元、竹村俊彦、尾作克彦と、空手部は大きく発展し、極真会、松濤会はお互いの長所を出し合つて一つの独特的の雰囲気を持つに到つた。この年、中村、仲村佐藤らは六年生で、夏の富士見高原合宿は、最高に楽しく充実したものだったと記憶している。

昭和39年夏は、仙台で合宿。この年には、沢村良勝、中島麒一郎が習志野松濤会から入部、また大橋勲、浦田隆弘、西田修二らが極真会に入っている。しかし、昭和40年、渋谷君が習志野松濤会へ合宿参加し、松濤会への純粹な気持を打ち出したことから、次第に部の統制を越えたものへと発展した。そして、極真会と松濤会の練習方法の違い、考え方の違いが表面化し、練習日も分かれるようになつた。先輩達の希望とは別に、二つの派が出来たことは、部員の増大と部の発展にともなう、二流派の組織化の面からは止むを得なかつたのかも知れない。また一つのものを深く追求するには、どうしても通らなければならない過程であつたかも知れない。

昭和43年には、極真会主将、長船広隆と、松濤会主将、牧野駿一となり、部は、はつきりと二つになつた。

（それまでは、一年毎に交互に主将を出し合う形であった。）これで、現役にとつてはスッキリした形となり、練習もし易くなつたのであるが、O.B.にとつては淋しいことであつた。そして、しばらくは、再び仲良く合同の練習が出来ることを夢みたものである。

牧野駿一主将を中心に動き出した松濤会は、習志野松濤会と密接に連絡をとり、金山洋（昭和44年卒）の部員確得の努力と共に一つの道を確保し、昭和44年の大野太郎、大久保正へと受け継がれた。すでに松濤会で組手をするものは居らず、フォームもまた以前にも増して流れるような形となつた。江上茂師範から与えられたテーマ、格闘を越えたものの何かを追求し、それに専念することとなつた。

昭和45年には、大型主将風間一、技とねばりの古川惣一郎の名コンビが活躍した。

昭和46年には、明朗活達な日野和雄主将を中心とした、高橋邦生、小室康男、柳下次雄、春原らの充実ぶり。

昭和47年には、誠実な人柄の西沢茂主将と、牛久保行男による和氣あるムード。

そして昭和48年、谷藤主格、金海洋雄副将、勝見千明幹部らの時代に入り、高等看護学校一年生15名が入部して一挙に大所帯となり、独特のムードを持つこととなつた。高看生女子部員の入部の歴史は、これまでに三たびあり、初代は鈴木さん、二代目は10名余、三代目は、加藤真佐子、尾堂紀子さんでそれぞれ青春の一頁に、空手、稽古の汗で想い出を綴りながら、学窓を巣立つてゆかれたものである。秋には新道場が落成し、都下六大学松濤会による記念演武会が盛大に行なわれた。参加校は、中央大学、専修大学、成城大学、東京農工大学、学習院大学であった。

今年は、昭和49年。空手部が出来て14年近く。医学部松濤会として、七周目にあたる。江上茂師範の御志を受け継いで、石川平八主将、汐見俊一副将、木村丹幹部のトリオは、今日も着実な歩みを重ねており、また六大学

松濤会とも連絡をとり合って、更に大きく視野を拡げている。

しかし、ここでもう一度、医学部空手部のことを思うとき、過去に汗と涙を流して部のために励んできた先輩達のことも忘れてはならない。それは流派を越えたものである。日本の空手界にとつても云えることであり、これからどのような形で空手を追求してゆくのか、他の流派とどのような形で接し、理解してゆけば良いのか。伝統を受け継いだ現役諸君の考えてゆかなければならぬことだと思われる。